発達理論の学び舎

Back Number: Vol 109

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

2161. 時系列データ分析による予測とシミレーション
2162.「デジタルラーニングと学習環境」の第三回目のクラス
2163. 研究計画書に対する評価
2164. 強烈な光に包まれる体験：サトルボディの不思議さ
2165. 今日の活動に向けて
2166. カフェテリアでのミーティングより
2167. 表現の困難性と論文執筆についての再考
2168. インターン六日目の朝に
2169. 満天の星空を眺める夢
2170. R能力の退行
2171. ヴィンセントとハンス
2172. 異物的存在
2173. 土曜日の朝に
2174. 四年振りの米国生活へ向けて
2175. Rコードの完成
2176. ダークブルーの空と日曜日の朝
2177. 膨大なパターンの構築物
2178. 秩序からの学び・混沌からの学び
2179. 二羽のカラスの争いより
2180. 構築・創造の喜び

2161. 時系列データ分析による予測とシミレーション

昨日は普段よりも作曲実践の時間を減らし、その代わりに二冊の学術書を読み進めていた。どちらも現在の、そして将来の自分の研究に関係している専門書である。一冊は“Introductory Time Series with R (2009)”という書籍であり、もう一冊は“A Use’s Guid to Netwok Analysis in R (2015)”という書籍だ。前者は、まさに今私が行っている研究に活用できるものであり、Rを用いて時系列データ分析を行う方法について紹介している。一方後者は、将来の自分の研究につながるものになるだろうという位置付けをしている。こちらの書籍な、Rを用いてネットワーク分析を行っていく方法について解説をしている。

これらの二冊は完全に研究者向けの専門書であり、両方の書籍を一日中食い入るように読み続け、どちらも共に読みきった自分の姿を見ていると、やはり科学研究に依然として強く惹かれるものを自分が感じているのだとわかる。非常に贅沢な悩みかもしれないが、作曲をすることと科学研究を行うことの充実感が等しいために、時にどちらにどれだけの時間を割くかに頭を悩ませることがある。

実際には、片方の実践をしている時はもう片方の実践など全く念頭にない。そうした悩みが出るのは大抵どちらの実践にも従事していない食事中や外出中の時である。昨日はまさに、作曲実践があることを忘れるぐらいに、研究の方に没頭していた。

ふと気づけば夜の九時を迎えており、そこから作曲実践を少々行ったが、先ほどまでの研究が気になり、再び研究関係の文献を読んでいる自分がいた。

昨日は上記の二冊以外にも、システム科学のモデリング技術を扱った非常に分厚い二冊の専門書をパラパラと眺めていた。そのうちの片方は、生物学の研究にダイナミックシステム理論のモデリング技術を活用したものであり、本書を知るきっかけになったのは、昨年の研究アドバイザーであったサスキア・クネン教授の論文に引用があったことである。

本書は、900ページ近いハードカバーであるため、外見上は面食らうが、中身は非常に読みやすい。もちろん私は生物学の事前知識はないため、細かな専門用語はわからないものが多いが、モデリング技術の解説は心理学・教育学研究にも非常に有益である。本書やその他の書籍で得られたモデリング技術の知識をこれから少しずつ研究に活用していきたいと思う。

システム科学にせよ、ネットワーク科学にせよ、それらの領域におけるモデリング技術を活用して何ができるのかというと、予測やシミレーションを行えるのが最も重要なことだろう。例えば、企業社会においては、既存の研修プログラムや教育プログラムの効果測定に予測やシミレーションを実施し、プログラムの検証に活用することができる。もちろん、予測やシミレーションは、既存のプログラムのみならず、これから導入しようとする新たなプログラムの効果予測を行うことにも活用できる。

自分のこれまでの七年間を振り返ってみると、成人発達理論の枠組みを活用した発達測定を行い、直近では実証的教育学の観点から、教育プログラムや教育ツールの効果測定を実証データに基づいて行うことに従事している。これまでの経験を通じて得られた知見をなんとか社会に還元できないかと考えていた矢先、まさに時系列データ分析やモデリング技術を活用する協働プロジェクトにお声掛けいただいた。

今朝方、送っていただいた資料を拝見していたところ、まさに自分がこれまで研究上行っていたことを、企業が具体的に直面している課題に対して適用する機会になりそうだ。今日はこれから先方との打ち合わせがあり、協働が実現されればと思う。フローニンゲン：2018/2/21（水）08:30

No.790: Existential Secure Base

It is the below-zero world outside. However, I notice that I have an existential secure base in myself. Groningen, 09:34, Thursday, 2/22/2018

2162.「デジタルラーニングと学習環境」の第三回目のクラス

午後三時を迎える頃、大学キャンパスから自宅に戻ってきた。今日は早朝にある企業とのオンラインミーティングがあり、その後すぐに自宅を出発し、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授の講義に参加した。

今日はいつもに比べてツショル教授のエネルギーが落ちているように見受けられたが、クラスの後半からはいつものように独特の活気を放ち始めた。今日のクラスのトピックは主に、「分散知性（distributed intelligence）」「状況的認知（situated cognitition）」「アフォーダンス」「ユーザー体験デザイン」についてであった。前者二つの英単語が日本語でそのように翻訳されているとは今日この瞬間に知ったのであるが、それらの概念は認知的発達に関する文献を過去に自ら読み進んでいる

中で何度も出会ってきていたものである。しかし、今日改めてツショル教授の講義を聞いているといくつか疑問点が湧いてきたため、その瞬間に自分で考えを深められそうにないものについてクラスの中で質問した。私は特に講師を困らせようと思って質問をしているわけではないのだが、事前知識がある領域に関する私の質問は教授にとっても答えにくいものが多いようだ。

ツショル教授と私の専門としている分野は当然異なるが、重なる部分もあり、その重なる部分に立脚する形で質問を投げかけているつもりだったのだが、ツショル教授は私の質問に対して笑みを交えながら唸り、しばらく沈黙があった後に考えを述べ始めた。今日のクラス内でそのようなやり取りがあった。

これは欧米の大学院に四年間ほどいて気付いたことなのだが、こちらから教授に何かを質問しても、完全に満足のいく回答を得られたことは一度もないのではないかと思う。そこから思うのは、質問とは決して回答を得るためのものではなく、回答者から得られる何かしらの新たな観点や刺激をもとに、再度自分に問い直し、そこから自分の頭で再び考えを進めていくためにあるのだと思う。

どれだけ知識が豊富で知性の高い教授に質問をしても、一度も完全に満足のいく回答が得られた試しがないことからも、自らの問いは、他者の観点を取り入れながらも、自らが率先して答えていくべきものなのだと思う。

クラスの休憩中、以前同じコースを受講していた元教師の女性から声をかけられ、「オリンピックはどれくらい見ているか？」と質問された。「あまり見ていない」と答えると、「これからオランダと日本のチームが決勝戦でぶつかる」と教えてくれた。競技は何やらスピードスケートの一種だそうだ。その女性からの質問が極めて面白く、私の回答に対する彼女の反応も極めて面白かった。「オランダと日本が決勝でぶつかるのだが、どちらを応援する？」という問いを日本人の私にしてきたのである。

「そうであれば日本を応援する」と答えると、「なぜ？」という困惑と笑みの混じった表情を浮かべていた。

クラス終了後、同じ研究グループに属している友人のハーメンと一緒にツショル教授のところに行き、簡単に立ち話をして教室を後にした。その後、ハーメンと一時間半ほどランチミーティングを行い、

このコースのグループ課題についてスケジュールとタスクを決めた。そのミーティングを終え、近所のチーズ屋に立ち寄ってから自宅に戻った。

今日はこれから本日のクラスの振り返りを行う。それは全て英文日記の方にメモとして残しておこうと思う。フローニンゲン：2018/2/21（水）16:05

No.791: Two Types of Fear of Death in the Business World

While reading a book about organizational pathologies, I realized that one of the real issues of CEOs did not lie in their management but in their fear of own death and organizational death. These two types of fear of death may accelerate the madness of corporate activities in our society. More precisely, all employees may have those types of fear and participate in escalating organizational insanity. That might be the root of a collusion for organizational pathologies. Groningen, 13:05, Thursday, 2/22/2018

2163. 研究計画書に対する評価

今日は友人のハーメンと共に、キャンパス内のカフェテリアでランチミーティングをした。お互いのインターンシップの進捗状況や修士論文の執筆状況についてまずは確認し合った。

ハーメンは、フローニンゲンの街にあるかなり大きな出版社にインターンをしているそうだ。その出版社は教育系の書籍や教材に定評があり、オランダ国内では有名らしい。規模も600人程度いるとのことであるからかなり大きな出版社である。ハーメンは週に三日ほどそこで勤務しているらしく、期間も六月までとかなり長い。

私は週に二日、フローニンゲン大学の研究機関に勤務し、しかも三月末までと比較的短いインターンであるため、ハーメンが所属するプログラムで要求されるインターンの内容と少しばかり異なるのかもしれない。

ハーメンに卒業後の進路について以前に尋ねた時はまだ未定とのことであったが、今はどうやらその出版社で職を得られればとのことである。そうした意味で、このインターン期間中の働きぶりは彼にとって重要になるだろう。

ハーメンと昼食を摂りながら様々な話をする中で、非常に些細なことだが様々な発見があった。一つ目は、予てから気になっていた二人の研究アドバイザーであるツショル教授の国籍についてであった。ハーメンもやはり正確にはわかっていないらしく、ただし、ツショル教授の英語の発音からドイツ人だろうとのことだった。ツショル教授は米国で六年ほど生活をしていたためか、ドイツ人らしさをほとんど感じない。それは諸々の意味において。

もう一つの発見は、ハーメンはあまりにも大柄であるため、身長を聞いてみると、「2m近くあるね」という返答があった。190cmを越しているのはわかっていたが、まさか2m近くあるとは思ってもみなかった。ついでに両親と妹の身長を聞いてみると、「父は自分と同じぐらいで、母はけっこう小さくて185cm、妹は190cmぐらいかな」と笑いながら答えていた。

ハーメンの妹は、フローニンゲン大学と同じく伝統校の一つであるライデン大学で言語学を学んでおり、福岡に留学していたことがあったらしい。その時に、彼女のあまりの大きさに各所で日本人から写真を迫られたというエピソードを聞かせてもらった。そのようなたわいもない話をしていると、ハーメンと私宛にツショル教授からメールが届いた。メールには、以前に提出した研究計画書に対しての評価書が添付されていた。

当然ながらハーメンと私に別々にメールが届けられたのだが、それはほとんど同じタイミングであり、早速メールを開いてお互いにどのような評価が得られたかを話し合った。

オランダの大学院は成績評価が厳しいことは以前に何度か紹介しているが、こうした論文の計画書に対しても評価は厳しい。ツショル教授からの評価レポートが一通、第二審査員の評価レポートが一通、合計で二つの評価レポートが返ってきた。結論から述べると、ハーメンは自らの受けた評価に相当落胆しているようだった。私もこのような形で計画書のセクションごとに1-3段階の評価が付され、各セクションにフィードバックコメントが付されるとは思ってもみなかった。

この点は昨年のプログラムの時と異なっており、事前に知っておきたかった情報である。ツショル教授は昨年からフローニンゲン大学に来たため、評価項目について事前に知らされておらず、その結果、私たちにあまり情報が下りてこなかったのかもしれないと思った。

© YOHEI KATO 2019

私は幸いにも、平均で2.7の評価を得たため、何とかこのまま研究を継続して良いことになったが、ハーメンは平均が2を切っていたらしく、計画書の再提出を促されたようだった。

そういえば先日にも、グルジアに戻った友人のラーナから、前の学期に履修していたコースの成績について質問を受けた。履修したコースはどれもラーナと私の二人だけしか受講者がいなかった。どうやらラーナは、元いたグルジアの大学にフローニンゲン大学での成績を提出する必要があるらしく、成績評価を早く欲しがっていたようだった。私の成績を知ったところであまり意味はないと思うのだが、その時はまだ結果が出ていなかったのでその旨を伝えた。

するとその返信に対して、一緒に履修していたシステマティックレビューの執筆方法に関するコースで追試になった、という連絡が来た。このコースの成績評価は、筆記試験ではなく、ポートフォリオ形式で毎週の課題に回答していく形式になっていた。

毎週課題に取り組んでいれば全体としてそれほど苦労はないのだが、このコースで追試扱いとなったラーナは全てのポートフォリオを再度別の課題論文に対して一から行わなければならず、単位の取得を諦めたというメールが来た。ラーナからの返信後、私もそのコースの成績評価を得た。正直なところ、ポートフォリオの課題が自由記述式の文章を書くものが多かったため、10段階評価のうちの8を超えるだろうと思っていたのだが、結果は7.7だった。オランダの大学院の成績評価は本当に厳しいと改めて思う。フローニンゲン：2018/2/21（水）16:43

No.792: New Insights on My Research

I had a wonderful meeting with one of the students in a different department than mine. He was a teacher, and he is very knowledgeable about teaching practice. Also, since he has the same passion with mine about MOOCs, we had a great conversation.

I asked some questions to him about other possible metrics in my research. He gave me some beneficial perspectives. I'll incorporate his insights into my research. I look forward to tomorrow's research internship. Groningen, 16:59, Thursday, 2/22/2018

2164. 強烈な光に包まれる体験：サトルボディの不思議さ

今朝方の夢の中で不思議な体験をした。これまで何度か体験したことがあるのだが、夢の中の身体が強烈な光に包まれるという体験である。

夢の中の私は、今の自宅と同じような寝室のベッドの上に横になっていた。すると突然、足先から頭のてっぺんにかけて光が上昇し、身体全体が強烈な光に包まれたのである。とりわけその光は、頭の部分で強く知覚された。白く薄黄色の光が特に頭の部分を包み込んでいた。

そこからさらに不思議な体験は続いた。夢の中の身体が光に包まれた後、肩甲骨の左側の背中の一箇所を強く押す力を感じた。それは誰かが背中のその場所のツボを押し込むような感覚であり、それはしばらくの時間続いた。背中の一箇所を押し込む不思議な力に気付いていると、その箇所は心臓の裏側であることにふと気づいた。

背中の一箇所から心臓にかけて向かう力。今から考えると、それは背中の外から背中の一点に向かい、そして心臓を貫く形で生じていた力なのではないかと思う。力の正体とその目的が何なのかはわからないが、背中の一点を押す力が収まった後、背中のその箇所が楽になっているような気がした。

夢の中で身体が光に包まれている最中、それよりも奇妙な体験をその他にもした。一つ目として、全身が光に包まれ、背中の一点を押す力が生じ始めた時、その力が背中の中に入っていくに応じて、少女の悲痛な声がどこからか聞こえてきたのである。それは何か助けを求めているような声だった。

その少女の声は私の耳に入り、さらにそれは背中を押す力の中にも混入した形で自分の身体に向かってきた。名の知らぬ少女の苦痛な声は一体どこから聞こえてきて、一体何を私に伝えようとしていたのか、それは今も定かではない。

身体全体が光に包まれ、背中を押す力が去った後、どこからともなくモーツァルトの音楽が聞こえてきた。そこで起きたもう一つの体験は、モーツァルトの音楽が先ほどの少女の声とは違った形で自分の身体に入り込んできたことだ。モーツァルトの音楽は、身体を包み込む光のようにまずは私の

身体全身を包んだ。その時までは、確かに私はモーツァルトの音楽を聴いているという感覚があったのだが、そこから奇妙な身体感覚を感じた。

自分の身体がモーツァルトの音楽になったのである。モーツァルトの音楽を聴く主体はそこにおらず、ましてや音楽を聴くという感覚も働いていない。そこにあったのは、モーツァルトの音楽と一体化した自分の身体だけであった。言い換えると、そこにあったのは、自分の身体というモーツァルトの音楽だけであった。

身体全体がモーツァルトの音楽と完全に合致した瞬間、私の意識もまた完全にモーツァルトの音楽となっていた。単純な話、そこでは意識が生み出す表象世界が全てモーツァルトの音楽で満たされたものになっていたのである。

自分の身体が光に包まれ、強烈な光を特に頭の部分で感じることは時折生じる現象である。しかし、今回のように背中を押す力や、モーツァルトの音楽と身体および意識が一体化する体験を伴うことは初めてのことであったように思う。夢の中の身体は、サトルボディに分類されるものだが、サトルの身体とサトルの意識下で起こっている現象は未だ解明されていないことが多々あるように思う。フローニンゲン：2018/2/22（木）06:38

No.793: ?!?

A day like “?!?” is sometimes inevitable in our life. Also, there is a day in which we want to think it as ?!?. That is the intrinsic nature of our daily life. Groningen, 18:26, Thursday, 2/22/2018

2165. 今日の活動に向けて

現在の気温はマイナス4度。昨日行きつけのチーズ屋に立ち寄った時、店主が来週からまた寒さが厳しくなると述べていたことを思い出す。

ここしばらく晴れの日がずっと続いており、来週からも晴れの日が続くことは喜ばしい。だが、三月を迎えようとしているにもかかわらず、どうやらまた厳しい寒さが戻ってくるようだ。天気予報を確認すると、確かに来週は最高気温ですらマイナスの日が続く。書斎の窓から外を眺めると、雪は一切降っていないのだが、車の屋根が白くなっているのが見える。雪は一切降ることなく、ただ気温がマイナ

スなだけの世界がこれから少し続くようだ。そうした外気の低さもあってか、少しばかり部屋が寒かった。暖房の設定を少し調節し、今日の活動を開始させた。

今の自分の生活リズムで最も望ましいのは、五時か六時の間に起床することのようだ。そうした時間に起床し、そこから活動を開始させると、午前中の間に随分と多くのことができる。今日も六時前に起床したため、一日の始まりがとてもスムーズである気がしている。

今日は午前中に一件ほど日本企業との協働プロジェクトの仕事が入っている。昨日は他の企業の担当者の方々と打ち合わせをしたが、お互いが世界のどこにいようとも、オンライン上で仕事を一緒にすることができるというのは本当に便利である。

以前の日記の中で、テクノロジーの進歩に劣後する集合意識の発達について書き留めていたが、このように世界のどこにいても日本企業と協働できるというのはテクノロジーがもたらす恩恵の一つだろう。

午前中にその仕事を終えたらば、そこからはいくつかの書籍を読み進めていきたい。昨日、オットー・ランクの“Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1932)”が届けられた。本書は400ページを超えるが、これから芸術と人間発達を探究していく上で非常に重要な文献になるだろう。早速目次を眺め、特に気になる箇所に印を入れた。本書は今週末から読み進めたいと思う。

今日はランクのその書籍を読むのではなく、組織の成人病理に関する“Organizational Pathology: Life and Death of Organizations (2012)”とネットワーク科学の研究方法について解説した“Doing Social Network Research: Network-based Research Design for Social Scientists (2015)”の二冊を読もうと思う。組織の精神病理の観点から組織開発にアプローチをしていくことに関心を持っていたため、前者の書籍はまさに私の関心に完全に合致したものである。本書で紹介されている、組織の精神病理を分析するためのフレームワークや組織の精神病理の発生メカニズムに関する記述は、一読に値するであろうし、それらを実際に実務の中で活用していきたいと思う。

また後者の書籍について、こちらはフローニンゲン大学のネットワーク分析のコースで必読図書となっていたものである。そのコースは社会学学科が提供しているものであり、最後の最後まで聴講

するか否かを悩んだが、実証的教育学のプログラムで要求されている他のコースに支障が出ることを懸念して聴講を諦めた。しかし、この課題図書には関心があったので、随分と前に購入だけはしておいた。本書には難解な数式が一切記載されておらず、社会科学系の研究者がネットワーク科学の知見を用いて研究を進めようと考えているのであれば、入門書としてとても良いのではないかと思う。今日はとりあえずこれらの二冊の書籍に取り掛かる。フローニンゲン:2018/2/22(木)07:05

No.794: With Someone

The question: “How is it possible to live with someone in an authentic way, transcending solipsism?” often arises from the depth of myself. Simultaneously, I frequently come across the question: “How is it possible to live alone in a genuine way?” Groningen, 08:18, Friday, 2/23/2018

2166. カフェテリアでのミーティングより

裸の木に小鳥が止まり、しばらく休んでから再び飛び立った。遠くの空が薄赤く夕日に照らされている。

今日も一日がゆっくりと終わりに近づいている。今日は氷点下の世界が続き、普段は暖かい部屋の中にいても寒さを感じるほどであった。しかし、そうした寒さの厳しい世界の中にあって、自分の内側には自己が落ち着ける確かな立脚点があることに気づく。

今日は午前中から午後にかけて、組織の精神病理に関する専門書を読み進めていた。12章あるうちの4章を読み終えてみると、当然ながら組織開発の支援に向けて有益な考え方がいくつかあったが、まだ大きく唸ってしまうほどの気づきはない。今のところ、本書の文章が外面的な記述に留まっていることが、深い気づきをこちらにもたらさない要因になっているのかもしれない。ある現象を外面的に記述するだけでは不十分であることをつくづく感じる。

組織の精神病理を扱う場合、どのような要因とメカニズムでそれが生じているのかを単に外面的に説明するだけでは、あまりこちらに伝わってくるものが少ないように思える。著者自身が組織の精神病理に介入した際に得られた独自の観点や考えを文章の中に盛り込んで欲しいと期待してしまう。

今週中に本書を全て読み終えるつもりでいるため、残りの章で少しでもそうした記述に出会えることを願う。

今日は午後の三時から、大学のカフェテリアに行き、一人の生徒とミーティングを行った。彼はスコットランドからの留学生であり、以前は英語の教師をしており、現在はフローニンゲン大学の心理学の学士課程に在籍している。なにやら私が昨年に修了したプログラムと現在私が所属しているプログラムのどちらかへの進学を検討しているらしく、二つのプログラムについて話を聞かせて欲しいとのことであった。

話を聞くと、彼は私と同い年であり、これまでの10年年間は教師として教育の分野に情熱を注いでいたようだった。その情熱は今も失われることなく、フローニンゲン大学で修士号を取得したら博士課程に進学するのではなく、再び教育現場に戻りたいという考えを持っているようだった。彼が私の研究について質問をし、現在はMOOCを含め、オンライン教育に関する研究をしていると伝えると、彼もMOOCとオンライン教育に強い関心を持っているとのことだった。

そこからは教育研究の話に花が咲き、随分と長く話し込んでいた。彼が極めてスマートであったため、本来は彼の進学相談に乗るはずだったのだが、その話は以外と早く終わり、そこからは私の研究についてあれこれと彼の意見を伺っていた。元教師かつ教育理論に造詣の深い彼から、実に多くの示唆に富む意見をもらうことができた。ちょうど明日は研究インターンシップのある日なので、今日彼との対話で生まれたアイデアを明日の研究で具現化させていきたい。フローニンゲン：2018/2/22（木）17:24

No.795: R programming codes

Since I completed the data collection last Monday, I finally started to write R programming codes today. I was a little bit struggling with writing R codes, but the progress was fine. By the end of next Friday, I hope to show the results of the following analyses: (1) variability type of sentence length, (2) the correlation between the variability type and completion rate, (3) the correlation between the variability type and weekly test scores, and so on. For the next week, I have to refresh my memory about how to write a code to repeat the same function. Groningen, 17:49, Friday, 2/23/2018

2167. 表現の困難性と論文執筆についての再考

昨日、表現の困難性について考えていた。それは学術論文の執筆しかり、作曲しかりだ。

自分は何を表現したいのか、何を伝えようとしているのかを見出すこともさることながら、それらが仮に見つかったとしても、それらをどのように表現するかもまた難しい。

昨日、友人のハーメンとカフェで会話をしているとき、ハーメンは博士課程の進学をあまり検討していないようだった。フローニンゲン大学の博士課程に進学する場合、それは大学から研究者として雇われることに他ならず、給料をもらいながら論文を執筆することが何よりも重要な仕事とされる。

ハーメンが指摘するように、一本の論文を査読付きジャーナルに載せるまでには多大な時間と労力を要する。論文を執筆するだけであるならば、文章を書くことが苦ではない研究者の場合、一本の論文を書き上げることにはさほど時間はかからないだろう。ただし、査読付きジャーナルで掲載してもらうためには、レビューアーによる査読があり、彼らからのフィードバックを元に論文を再度加筆修正し、場合によってはその往復が何度か続く場合もあり、さらには修正をした論文が必ずしもジャーナルに掲載されない場合もある。そのようなことを考えると、科学論文をジャーナルに掲載するためには多大な労力を要することがわかる。

また、苦労をして書き上げた論文がひとたびジャーナルに掲載されたとしても、現在の論文ジャーナルのほとんどは一般人には無料でアクセスできないようになっており、結局読み手はごく少数の研究者だけとなることがほとんどである。例えば、教育研究の論文を書き上げ、本来は教育の実務家に向けて書いたはずのインプリケーションが、目的とする教育実践者に一切読まれることはないというのはとても残念なことである。私が今でも依然として抱いている科学論文に対する疑いの一つはこの点にある。

もちろん、自分の論文が当該科学領域の進展に何かしらの貢献を果たすことができるのであれば、それはまさに科学者冥利に尽きることだと思う。しかしながら、やはりごくわずかの研究者だけに論文が読まれ、そこで知が独占され、内輪の中で対話を行うこと──往々にして対話すらも起こらないのだが──に大きな意義を感じないというのが正直なところだ。

一方で、ハーメンと別れた後、自宅に戻る道中で考えていたのは、科学研究の専門家によるレビューとフィードバックを受けながら論文を書き続けることの意義だった。やはり科学研究を専門とする者たちによるフィードバックを得なければ磨かれようのない知性や能力があるのは確かである。そこで培われるのは非常に特殊な知性や能力であるとつくづく思う。どこまで科学コミュニティーに参画し、科学研究の専門家からどれだけフィードバックを受けるかの塩梅について、今後さらに真剣に考えていく必要があるだろう。

査読付きジャーナルに掲載されるために執筆する論文にも意義があることは確かであるが、そうしたことに一生涯従事するよりも、仮に他の専門家のフィードバックがなかったとしても、書きたいことをただひたすらに書き続けることの方が価値があるように思えることがある。現代社会において、自らの内発的な衝動に基づいて、書きたいことだけを書き続けている研究者などほとんどいないのだから。フローニンゲン：2018/2/22（木）20:39

No.796: Movement

I can see a gentle rainbow-like sky in the early morning in Groningen. It seems that I can move forward from the bowls of the earth to the ground and the celestial sphere, and that I can also move in the opposite direction. Groningen, 07:42, Saturday, 2/24/2018

2168. インターン六日目の朝に

今日は五時半に起床し、六時過ぎに一日の活動を開始した。今日はインターンの六日目となる。

天気予報を確認すると、今日はオフィスへの行き来の際にはどちらもマイナスの気温のようだ。月曜日の五日目のインターンの日、私は研究オフィスに向かう際に、新たな一日が何か大きな海の一雫のように尊いもののように感じられた。今日もまた同じような気持ちを持っている。新たな一日が一滴の雫であり、同時にその一滴は大海そのものに他ならない。

外は相変わらず真っ暗闇に包まれているが、私の気持ちは穏やかでいて、どこか光のようなものを感じる。欧州で生活を始めた一昨年とは闇への印象もその受け取り方も違う。これもおそらく、一昨年から今日にかけて、日々を大海の一滴として生きてきたことによる結果なのかもしれない。

今日はオフィスに到着したら、まずは一階に降りてコーヒーを購入しようと思う。今週の月曜日は、とにかくデータの整理に朝一番で取り掛かろうと意気込んでいたため、コーヒーを購入することもせず、自分のオフィスに到着してすぐに作業に取り掛かっていた。そのおかげもあってデータ整理はひと段落が着いたので、今日は早朝にコーヒーを購入するゆとりがある。

今借りているオフィスの建物の一階には、質の高いコーヒーを購入することができる場所がある。自分でコーヒー豆と香りを選択し、一日に二回ほどMサイズのものを買う習慣がある──正確にはそういう習慣を自ら意識的に作った。早朝にコーヒーを購入し、オフィスに戻ったら、早速プログラミング言語のRを用いてコードを書いていく。

毎日作曲をする際に創造の喜びを感じられるのと同様に、プログラミングコードを書くことも創造の喜びを喚起してくれる。月曜日から金曜日にかけて、コードを書きたいという衝動に囚われそうになったが、他の研究も並行して走っているため、インターン先の研究は基本的にオフィスの中だけで行うようにと自らに言い聞かせていた。そうしたこともあり、今日はプログラミングコードを書くことの喜びを充分に感じられる日になるだろう。すでにどのようなコードを書けばいいのかのイメージは頭の中にあり、さらには、そうしたイメージを具現化させるための見本となるコードが掲載されているウェブサイトも知っている。そのサイトを参照しながら、以前に作った三つの定量化基準のそれぞれにプログラミングコードを書きたいと思う。

前回オフィスを訪れたのは月曜日であり、その日は四時を過ぎるとフロアに残っているのは私だけとなった。オランダでは月曜日に閉まっている店もちらほらあり、月曜日は早めに仕事を切り上げる習慣があるのだろうか。金曜日は六時近くまでオフィスに残っている人も少数いるが、大抵はその後すぐに多くの人が帰る。MOOCチームのリーダーを務めているトムも、週に四日だけ勤務し、しかもそのうちの一日は午前中までの仕事らしい。こうしたゆとりのある働き方は、オフィス内の空気の中に溶け込んでいる。今日もそうした雰囲気の中で研究に打ち込むことになるだろう。フローニンゲン：2018/2/23（金）06:39

No.797: Following and Leading

It is difficult to follow somebody and to lead someone else, isn’t it? Groningen, 07:49, Saturday, 2/24/2018

2169. 満天の星空を眺める夢

研究インターンも六日目が過ぎていることに改めて気付く。週に二回、インターン先のオフィスに勤務しているため、今日をもって第三週目が終わることになる。今回のインターンは規定では七週間ほどのものであるから、すでに半分近く過ぎたことになる。今のところ研究は計画取りに進んでいる。焦る必要はないのだが、ここからはデータ分析に集中し、計画よりも少し前倒しで分析を行い、分析結果のレポートと関係当事者への報告資料を作成する時間的ゆとりをもたせたいと思う。

今朝方の夢の内容が少しばかり脳裏に残っている。夢の中で、友人が手術を受けたと私に打ち明けた。手術後の部位を私に見せてくれたのだが、そもそもその手術をする意味はどこにあったのか、手術後にその部位に痛みや違和感はないかどうかを私は質問していた。友人曰く、そこに痛みや違和感などは特にないが、手術を受けたことは気まぐれだったと言う。

その話を聞いたのは、一軒家のような小さな病院の中でだった。病院の待合室には食卓があり、そこには別の友人の姿が見えた。そこで彼は机に向かってなにやら勉強をしていた。何を勉強しているのかと尋ねると、医師になるための勉強だと微笑みながら述べた。

彼の勉強の邪魔をしてはならないと思い、私はその場を離れ、別の部屋に向かった。そこもまた食卓のある空間が広がっており、そこには大学時代の友人が二人ほどいた。二人は何やら酒を飲みながらご飯を食べている。二人に近づいて、彼らと久しぶりに少しばかり話をすることにした。

二人とも大学一年次の第二外国語のクラスが同じであり、顔見知りである。二人のうちの一人は、ロースクール修了後、司法試験に合格したことを私は知っていた。その彼がご飯をほうばりながら、近況について話し始めた。

友人A:「そういえば、最近公認会計士の試験に合格したよ」

友人B:「おめでとう！えっ、でも弁護士としての仕事をすでにしてたよね？」

友人A:「うん、弁護士としての仕事をしながら勉強してたんだ」

私:「それは見事だね。それにしても、弁護士と会計士の資格を持っている風貌には全く見えないが(笑)」

友人B:「確かにそうは見えないね(笑)」

司法試験と会計士試験の双方に合格した友人も笑っており、私たちは彼を盛大に祝福した。二人の友人としばらく話をした後、手術が行われる部屋を覗きに行った。

すると足元に実家にいる愛犬がいた。小さく尻尾を振りながら、こちらを見ている。愛犬が手術を受けることになっていたわけではなく、誰か見知らぬ人間が手術をこれから受けることになっていたのだが、私は少し不気味なものを感じた。そのため、すぐにその場を立ち去ろうとした。しかし、手術を担当する医師が私に気づき、私を呼び止めた。

私は一刻も早くこの場から立ち去ろうと思っていたため、その呼びかけを無視して部屋を出た。すると、医師も含めその助手達も私を追いかけるように部屋から出てきた。その時、私の友人の一人が、呪術的な力を使って医師たちの動きを止めた。彼曰く、そう長くは動きを止められないから早く逃げろとのことだった。

私は愛犬と共に、その場を立ち去り、病院の外に出た。そして最寄りの地下鉄駅に駆け込み、地下鉄に乗った。すると、その地下鉄は日本のものではなく、どこか米国の地下鉄のような姿をしていた。実際に、乗客のほとんどは日本人ではなく、米国人であった。

長らく地下鉄に揺られ、無事にどこか遠くの駅に到着した。駅から外に出てみると、もう辺りは真っ暗であった。しかもそこは、先ほどの街中とは打って変わり、とても田舎のように感じた。ふと空を見上げると、そこにはかつて見たことのないほどに、無数の星々が輝いていた。

光り輝く星の数に圧倒されたばかりではなく、星の光が実に様々であり、その美しさにも見とれていた。また、夜空には絶えず流れ星の大群が流れていた。

私はこんな星空を見たことがなかった。輝く星で埋め尽くされた夜空、そして絶えず流れる流れ星の大群。

私は流れ星の一つが地面にこぼれてきてくれはしないだろうかと密かに願っていた。フローニンゲン:2018/2/23(金)07:10

No.798: Spiral Stairs

Probably, modern people are enchanted by magic. New magic has always awaited for us even if we awake from the previous one. All we can do is go up the spiral stairs to endlessly have a dream and awake. Groningen, 08:27, Saturday, 2/24/2018

2170. R能力の退行

今日は研究インターンの六日目であった。結論から述べると、今日の研究は全くもって進まなかった。その最大の原因は、午前中の三時間を研究以外の個人的な問題の対応に割かざるをえなかったことだろう。またそれに加えて、Rのプログラミング言語を思っていた以上に忘れていたことも重大な要因である。

オフィスから自宅に帰る最中に、Rのコードを思っていた以上に書けなかった自分に対して憤りを感じていた。何をそこまで悔しがる必要があるのかと思う自分もいたのだが、プログラミングコードが書けなかった自分を随分と攻撃するような思考や感情が自分のうちに芽生えていた。

オフィスから少し走って身体を動かせば、そうした悔しさも晴れるだろうかと思って試してみたのだが、一向に効き目がなかった。オフィスからの帰り道、河川敷のサイクリングロードを歩いている最中、つまずいたコードの箇所の解決策をなんとか頭からひねり出そうとしていた。

そもそもRに関するエキスパートではないのだから、無い知識をいくらこねくり回そうが良い解決策など思いつくはずもなかった。自分の右足の太ももを叩いたり、手袋をはめた両手をパンパンと打ち鳴らしてみたのだが、そうした身体動作も当然ながら一向に効き目がない。天を仰ぎ見たり、遠方の夕暮れ時の空を眺めたりもしてみたのだが、それらも何らの効果がなかった。独り言をぶつぶつ言ったり、奇妙な動作をしながらサイクリングロードを進んでいたためか、ランニング中の人とすれ違った時、その人は私を見て何やら微笑んでいた。

午前中に時間を無駄にし、昼食後から巻き返しを図ろうとしたのだが、Rの能力に関する退行現象が起きており、巻き返しなど夢のまた夢であった。人間の能力の発達というのは、本当に停滞や退行を伴いながら進んでいくのだということを強く実感した。

おそらく私がつまずいていた箇所は大したことではないはずなのだ。データの定量化の最初の方のプロセスに関するコードは、比較的速やかに書き上げることができた。繰り返しの処理を行うための関数も無事に書くことができたのだが、それを実行してみると、どうもうまくいかない。関数そのものは正しいはずなのだが、3000個のデータをうまく一括して処理することができない。

定量化基準に関してはうまくコードが書け、それを実行すれば、一つ一つのデータを見事に定量化できる。ただし、繰り返しの処理の関数がうまく機能しなかった。

3000個のデータポイントをまとめて100個ほど定量化することは容易なのだが、それを30回繰り返すのも億劫であるし、基本的に手作業が生じる場合には人的ミスが発生しやすいため、できるだけ手作業を避けてコンピューターに処理を任せるのが賢明だ。

勤務時間が終わりに近づく一時間前になってもうまくコードが書けなかったため、手作業で30回ほどコードを打って、それをエクセルに入力していくとどれほど時間がかかるのかを計測してみた。すると、確かに手間であることは確かだが、3000個の定性データをMOOCのインターフェイスから一つ一つエクセルに移して行った時よりも随分と楽であった。しかし、その案を実行するのではなく、この問題については少しばかり寝かせ、また月曜日に解決策を考えたいと思う。フローニンゲン：2018/2/23（金）20:01

No.799: The Progress of R Programming

Yesterday, I failed to complete writing R codes for the data analysis in my research. I was very dissatisfied with the progress. Yet, fortunately, I made a breakthrough in writing R codes today. By virtue of it, I finished generating each time-series in every week's lecture in the targeted MOOC of my research. Next Monday, I'll conduct detrended fluctuation analysis and compare each fractal dimension with the weekly test scores and the completion ratios. Groningen, 20:18, Saturday, 2/24/2018

2171. ヴィンセントとハンス教授

今日の自らの有り様に少々反省をしなければならない。Rのプログラミングコードが思ったほど書けなかったことが一体なんだというのだろうか。オフィスを去り、河川敷のサイクリングロードを歩いている最中のあの悔しがりようは一体なんだろうか。自分はどこか純朴過ぎるのではないだろうか。

Rのプログラミングコードが思ったほど書けなかったことに対して、なぜ私はあそこまで悔しさを感じていたのだろうか。サイクリングロードを歩きながら、自分がまだ「悔しさ」という感情を持ちうるということに少々驚いた。悔しさの感情が芽生えた背景には、小さな自我への固執が必ずあるだろう。

自我のどういった側面に自分は囚われていたのだろうか。それがわからないということ、まだそうしたことを探さなければならない場所に自分がいることに少々落胆する。仮に自我への固執地点の探究そのものが自我がこしらえた罠だとしても、私はあえてその罠の中に飛び込む形で自我の策略を暴きたいと思う。

今朝、自分が独我論を超えて、真に誰かと共に生きていくことは可能だろうか？ということを考えていた。この主題は、欧州での生活が一日一日と過ぎ行く中で、より存在感を増す。

自分の認識世界には他者が必ず存在しているはずであり、私の日々は他者なくしては成り立たない。しかし、どこかそうした他者と共に歩んでいるという実感が湧かない時があるのも確かなのだ。そういう時は大抵、自分の存在すらも明滅している。

早朝に考えていたのは、真に他者と共に生きることの困難性のみならず、それと同時に、真に孤独のうちに生きることの困難性であった。自らの存在は他者と完全に共有される形で存在しているのか、それとも完全に孤独のうちに存在しているのか考えたことはないだろうか。

今日はインターン先のオフィスで初めてもう一人のインターンであるヴィンセントと話をした。ヴィンセント宛に今日も電話が二件ほどかかってきて、「彼は水曜日しかここにいません」と相手に伝えたところ、「今日も働いているはずなのですが・・・」という返答があった。「いや、そんなはずはないのですが・・・」と答えると、相手はヴィンセントにメールを送ってみると述べた。二件目の電話があった数分後、ヴィンセントから電話があった。

彼はどうやら別のキャンパスで今日は勤務していたらしい。やたらとこちらのオフィスにヴィンセント宛の電話がかかってくるものだから、私も何かおかしいと思っていた。どうやらヴィンセントは、オフィス内の電話からログアウトすることを忘れていたらしく、代わりにログアウトしておいてくれないかと私に依頼をしてきた。私はその時、そもそも電話にログインすることができることを初めて知った。

オランダの巨匠ヴィンセント・ヴァン・ゴッホと同じファーストネームを持つヴィンセントと未だに顔を合わせたことはないが、今日初めて声を聞くことができた。ヴィンセントに会う日も近いかも知れない。

ヴィンセントと少しばかり電話越しに話をし、受話器を置くと、隣の部屋のハンス教授が私の部屋の扉をノックした。

ハンス:「ヨウヘイ、やったぞ、金メダルだ！」

私:「えっ、誰がですか？」

ハンス:「スケートチームだよ」

私:「オランダの？」

ハンス:「そりゃあそうさ」

私:「おめでとうございます」

ハンス:「なんだ、ヨウヘイはオリンピックをあまり追いかけてないのか？」

私:「ええ、それほど。ですがニュースで少し確認してますよ」

ハンス:「そうかぁ。いや〜、それにしてもオランダチームは見事だったよ。ところでヨウヘイはどこから来たんだっけ？」

私:「日本です」

隣の部屋にいるハンス教授はとても人柄がいい。今朝も一階のコーヒーマシーンの前でばったり出くわし、そこで少し立ち話をした。

ハンス:「コーヒーで一日をスタートだな」

私:「ええ。ここのコーヒーの質はいいですね」

そんなやり取りをしていた。先ほどのオリンピックのやり取りの前は、ちょうどヴィンセントとのやり取りの後であり、苦戦しているRのコードの解決策をこれから見つけようと士気を高めたところだったので、肩透かしを食らったような気がした。

ヴィンセントとのやり取り、ハンス教授とのやり取りがあってもまだ他者と共に自分が生きていないと言えるだろうか。やはり私は他者と共に生きているような気がしないでもない。フローニンゲン:2018/2/23(金)21:20

No.800: Both Masculinity and Femininity

All of us have both masculinity and femininity. I think it is crucial not to provide questions and answers from either side, but to do so from both sides. Groningen, 08:11, Sunday, 2/25/2018

2172. 異物的存在

今朝は五時過ぎに起床し、五時半から今日の活動を開始した。今日から土日である。

昨日から一夜明け、随分と心の平静が取り戻されたように思う。昨日、研究の際に用いるプログラミングコードが思っていたほどに書けず、少々落胆と憤りを感じていた。睡眠を挟むことによって、就寝中にあれこれと整理されたようである。しかし、今朝方の夢の中では、昨日の憤りの感情が影響してか、少々暴力的な夢を見た。

元ポルトガル代表の名サッカー選手が代表チームの監督ともめ、フィールド内で殴り合いを始めた。その選手がゴールを決めた後、ゴール裏でその殴り合いは始まった。私はコートを俯瞰する形でそ

の様子を眺めていた。かつてのポルトガル代表の英雄は、ゴール後のパフォーマンスのためにゴール裏に行き、そこで監督がその選手に何かを指示しているようだった。

最初その選手は監督の意見に耳を傾けており、その後で自分の見解を述べているようだった。すると、監督が突然にその選手の左の横腹を殴った。その選手は地面に倒れ込み、激しく身もだえしている。状況がよく掴めなかったのだが、なぜか監督も地面に倒れこんでおり、苦しそうに体を左右に揺すっている。 そうした中でも、その監督はまだその選手に指示を与えている。それは命令と言った方が正確かもしれない。

ポルトガル代表の元英雄は仰向けになって、左の横腹を押さえていた。監督のしつこい命令にしびれを切らしたのか、その選手は監督の顔の上を通り越す形で地面に向かって唾を吐きかけた。そんな夢の場面を覚えている。その後、私は夜中に一度嘔吐のような症状に見舞われた。

これは胃の内容物を外に出すような嘔吐ではない。ここ数ヶ月間を振り返ってみると、数回ほど同じような症状に見舞われたことがあったように思うが、それは存在的な嘔吐である。

何回か咳き込み、最初の咳の際に、自分の存在の内側から何かを外に吐き出そうとするような感覚があった。

自分の中に潜む異物。何か異物としての存在が自分の内側に生息しているのだということがはっきりとわかる。その姿形は定かではない。しかし、それが確かに自分の中で生命を持って活動しているということを最近より鮮明に理解するようになっている。自分の中に一体どのような異物としての存在が混入しているのだろうか。

昨日の落胆と憤り、そして今朝方の嘔吐は、この異物的存在と密接に関わっているように思う。外側の世界で自分とは異質な存在と向き合う日々、そして内側の世界に潜む異質な存在と向き合う日々が続く。

内外の異質な存在は今後も存在し続けるだろう。そうした存在と向き合うことに何かを求めることは、もはやほとんどないと言ってもいいかもしれない。ただし、その行為が自らを少しずつ変化させているのは確かなようだ。

© YOHEI KATO 2019

今朝の外側の世界は闇が深く、無音世界としてそこに佇んでいる。フローニンゲン:2018/2/24(土)06:06

No.801:Dancing Intrinsic Motivation

I often feel the dynamism of my intrinsic motivation. Whenever I observe it, the feeling is always distinct, which is quite intriguing to me. Groningen, 08:24, Sunday, 2/25/2018

2173. 土曜日の朝に

ここ最近は研究計画書を書く機会が少々多い。今日も一つ書きかけの研究計画書を仕上げる必要がある。それは、今年の秋から所属予定の米国の大学院に提出するためのものである。その大学院に受け入れてもらえるかはまだ一切わからず、現在は応募段階である。

応募の締め切りが来週に迫っており、今日は応募書類の最後のピースである研究計画書を最終稿としたい。それ以外の書類は全て揃っており、全てオンライン上の出願ページにアップロードしてある。あとはこの研究計画書を最終版にするだけである。振り返ってみると、最初のドラフトは年末に日本に一時帰国する際の移動の時に書き上げていた。それから何度か推敲を重ねている。

一応最終ドラフトが仕上がったのは二週間ほど前であり、そこから今日まで文章を寝かせていた。当初の計画通り、この二日間の休日を使って最終確認を行い、研究計画書を含めた全ての応募書類を提出したい。それがこの休日にやるべき最も重要なことだ。

昨日のプログラミングの件を通じて、プログラミング技術の習得にせよ、作曲技術の習得にせよ、決して焦ってはならず、着実に実践を日々重ねていくことが重要であると改めて思った。プログラミングに関しては、ここ最近は触れる機会がそれほど多くなく、前々学期に履修していたコースでRを用いていたぐらいであろうか。そうしたこともあり、実践間隔が空いてしまい、その結果としてプログラミングの感覚を衰えさせてしまったのだろう。

過度に実践し過ぎることもなく、また過度に実践間隔を空けるのでもなく、適度な休息を挟みながらも継続的に実践に従事することの難しさを思う。本日の最優先課題は、客員研究員としての応募書類を完成させることであるが、昨日の研究の続きを行いたいという気持ちが高まる。

欧州での二年目の生活で特に気をつけていたのは、週末はできるだけ研究から離れ、自分の関心の赴くままに書籍や論文を読んだり、作曲をすることであった。しかし、今日は少しばかりRをいじってもいいのではないかという気がしている。せっかく昨日にRに触れ、少しばかり感覚を取り戻したため、ここでさらにその感覚を取り戻したいという思いが湧き上がってくる。また、昨日オフィスからの帰り道にあれこれとプログラミングコードについて思考を巡らせていたことが、今日何らかの形として現れるのではないかという期待もある。そうしたこともあり、今日はどこかのタイミングでRに触れたいと思う。

客員研究員としての応募書類の完成とRに触れる以外の時間は、全て作曲実践に充てたいと思う。今日も淡々と流れる水脈のような日になるだろう。フローニンゲン:2018/2/24(土)06:25

No.802: Sound of Human Voice

I've been recently enraptured by the sound of human voice. It has a unique power to resonate with the depth of my being. Groningen, 18:27, Sunday, 2/25/2018

2174. 四年振りの米国生活へ向けて

早朝、薄い虹色の空がフローニンゲンの上空に広がっていた。空を見ながら、地底から地上へ、天上へという上昇の運動と、天上から地上へ、地底へという下降の運動について思いを馳せていた。

今日もこの世界での歩みを進めていこうと思う。朝食がてら果物を食卓に取りに行き、それを持って食卓の窓から外を眺めていた。すると、小鳥が目の前の裸の木に止まっていた。その小鳥をじっと観察してみると、その小鳥は随分と小刻みに頭を四方八方に動かしていることがわかった。周りの世界を随分と警戒しているようだ。何かを警戒し、何かを恐れているがゆえの多動というものがあるのかもしれない。

午前中の仕事に取り掛かる前に、断片的に様々なことを考えていた。誰かについていこうとすることと誰かについてきてもらうようにすることの難しさ。前者は従属という意味であれば、人間は比較的容易に他者に従属をする。しかし、他者に寄り添うという意味でのそれであるならば、それは意外と難しい。一方、誰かを隷属させる形で率いていくことはそれほど難しくないだろうが、他者が自律的

に動きながらも自らについてきてもらうように他者を導いていくことは容易ではない。そのようなことをぼんやり考えていた。

今日はこれから集中して、客員研究員の応募のための研究計画書を最終稿に仕上げていく。二週間ほど寝かせた文章であるため、まずは全体を最初から読み返し、細かな文言の修正を行っていく。よほどのことがない限り、無駄な文章を付け加える必要はないだろう。研究計画書は簡潔でなければならない旨の記載が募集事項の説明の中にあった。

再び米国の地に戻り、そこで研究生活を始めることになれば、その場所でしばらく落ち着きたいと思う。今度の場所での生活はきっと長いものになるだろう。そして、そこはそれに価する場所であると思っている。早いもので、四年間生活をしていた米国を離れたのは、今からもう三年も前になる。

仮に今年の秋から米国に戻ることになれば、そこでの生活はおよそ四年振りとなるだろうか。この四年間の自らの歩みを確認する上でも、今年の秋から米国の大学院で研究を継続させられたらと思う。
フローニンゲン：2018/2/24（土）09:59

No.803: Silent Snowfall

It suddenly began to snow. Since I was being absorbed into writing a scientific article, I couldn't recognize it. What a beautiful and silent snowfall is. Groningen, 18:34, Sunday, 2/25/2018

2175. Rコードの完成

夕方のフローニンゲンの空はとても美しい。特に、この季節の夕方のフローニンゲンの空は、複数の色が薄いグラデーションを生み出している。手前の空は成層圏を映し出すかのような薄い青色を帯びており、遠くの空へ向かっていくに応じて少しずつ赤みを増す。私はこの時間の夕焼け空が本当に好きなようで、先ほども書斎の窓越しからぼんやりと空を眺めていた。

一切の雲がなく、空にあるのは空のみなのだ。広大な空がどこまでも遠くへ広がっている。

今日は午前中に、米国の大学院へ客員研究員としての応募をするための書類を完成させた。最後に残っていたのは、研究計画書であり、結局細かな点をいくつも修正することになった。最後に出

来上がったのは納得のいく計画書であり、この研究を実際のその大学で行えたらと思う。仮にその大学院に受け入れられたら、計画書に明記している三人の教授に師事しようと思う。一人は音楽学科、もう一人は統計学科、そしてもう一人は教育学科に在籍している教授である。彼らからは年末年始にかけてメールの返信を受け、仮に私が客員研究員としてその大学に所属することになれば、研究に協力してくれることになった。是非とも彼らとの協働研究が現実のものになればと思う。

昼食後にもう一度全ての提出書類を見直し、応募書類の提出を済ませた。あとは結果を待つのみである。結果は遅くとも六月までにわかるそうだ。ちょうどその時期は、アムステルダムで開催される国際ジャン・ピアジェ学会に参加している頃かもしれない。結果がどのようであったとしても、それを受け入れ、また次の活動につなげていきたいと思う。

午後からは、結局インターンで行っている研究の続きを行った。自宅ではできるだけこの研究をしないようにしていたのだが、昨日の件もあったため、どうしてもプログラミング言語のRをいじりたくなってしまった。

昨日、オフィスからの帰り道、とにかくプログラミングコードについてあれこれ考えを巡らせていたのが功を奏したのか、昨日苦戦していた問題が先ほどなんとすんなり解決した。当然何回かコードを書き直したりしていたが、なぜだかわからないが最終的なコードの輪郭がぼんやりとその時に見えており、そこから逆算してコードを積み重ねていったらうまくいった。これには正直、自分自身が一番驚いた。

このおかげもあって、3000個を越すデータポイントに対して一つ一つ定量化を行う大きな手間が省けた。早速、定量化されたデータをグラフ化し、時系列データを眺めてみた。すると興味深いことに、私が立てていた仮説の通り、対象としているMOOCのコースの各週の授業はどれもみな、異なる変動性を持っていることが視覚的にわかった。

ここから私は、今回の研究の核になる「トレンド除去変動解析」のプログラミングコードを書き、それを実行してみた。すると、これも仮説を立てていた通り、各週の授業はどれも異なるフラクタル次元を持っていることがわかった。月曜日のインターンでは、各週の授業が持つ異なるフラクタル次元と

各週のテストスコアや授業の完遂率との相関関係などを調べていきたい。無事にRのコードを書くことができ、少しばかり安堵感に包まれている。フローニンゲン：2018/2/24（土）18:32

No.804:Up From the Celestial Sphere

The sky, which seems as if we could hear a sacred voice from the celestial sphere, is emerging. Such a holy night is embracing this moment. Groningen, 19:40, Sunday, 2/25/2018

2176. ダークブルーの空と日曜日の朝

今朝は六時前に起床し、六時半から本日の活動を開始した。昨日と同じのようであり、確かに異なる今日という日。

今日は日曜日であるが、平日そして昨日と変わらずに、自分のライフワークの一つ一つを前に進めていこうと思う。昨日はプログラミング言語Rのコードを満足のいくレベルで書くことができた。

金曜日にインターン先のオフィスから帰ってくる最中の落胆振りとは打って変わり、その翌日にコード上の問題を速やかに解決し、研究がぐっと前進したことは大変喜ばしい。Rのスキルが退行をしていたことは、まさに能力の成長の本質を示している。

私たちの能力は、絶えず停滞と退行を繰り返しながら、実践を通じて徐々に高度なものに変容を遂げていく。個別のスキルのみならず、研究全体を俯瞰的に眺めてみると、今回のように分析作業でつまずいていたことからも、研究自体も停滞と退行という運動を行っていることがわかる。

一つのスキルを取ってみても、一つの研究を取ってみても、それは上下に運動を続ける生命体のようである。そうした上下動を伴いながらも、内省の伴った実践を継続させていけば、その運動は螺旋階段を登るように徐々に高度なものになっていくだろう。

一つのスキル、一つの研究の発達過程は、本当に一人の人間の発達過程に他ならない。こうしたことを知っているがゆえに、私は一つのスキル、一つの研究が持つ意義と尊さを強く実感するのだろう。

今日は午前中に、来週の木曜日にオンラインで参加させていただく講演の打ち合わせを行う。それが今朝の最初の仕事になるだろう。対外的な仕事としてそれが今日の初めにあり、自分のライフワークである日記の執筆と作曲についてはその仕事の前に少しばかり進めていこうと思う。

絶えず文章を書き、絶えず曲を作るということ。それらは習慣となり、習慣を超えて、自らの人生とほぼ一体化をし始めている。このライフワークは本当にこれからなのだと思う。最後の日に向かって、今日、そして明日からも少しずつ建築を進めていきたい。

早朝の七時を迎える前のフローニンゲンの空は、ダークブルーに包まれている。もう真っ黒な闇ではない。そこにあるのは、少し青みがかかった深海のような空である。濃く深いダークブルーの空を眺めながら、今朝方の夢について意識を当ててみた。

確かに私は何らかの夢を見ていたはずなのだが、今日はあまり思い出すことができない。そのような日もあるだろう。だが、夢の内容を覚えている時は、できるだけその内容を自らの内側に定位させていきたいと思う。夢は、覚醒状態で得られる思考や感覚を凌ぐほどの意味内容を持っている場合が多いのであるから。

ダークブルーの空がこれから徐々に明けてくるのに応じて、今日の活動をゆっくりと開始させていきたい。フローニンゲン：2018/2/25（日）06:55

No.805: Agape

Not only snow but also agape falls down from the celestial sphere. Agape with snow is falling down to the ground at this moment. Groningen, 19:50, Sunday, 2/25/2018

2177. 膨大なパターンの構築物

徐々に夜が明けてきた。その証拠に、ダークブルーの空が少しずつライトブルーに変わり始めている。

今天気予報を確認してみると、今日はもしかすると一日のどこかで雪が降るかもしれないそうだ。行きつけのチーズ屋の店主と週末に少しばかり話をしていたように、明日からは再びぐっと冷え込む。

特に水曜日は、最高気温でさえマイナス4度を示している。三月に入ろうかというのに寒さは逆戻りしたようだ。

今日はインターンで行っている研究には一切手をつけない。昨日、プログラミング言語のRをいじりだすと、結局数時間もそれに没頭している自分がいた。明日にインターンがあるのだから、今日は一旦研究から離れ、探索的に自分の関心の赴くままに読書をしたり、作曲実践に時間を充てたいと思う。今日の読書は、ネットワーク科学に関する専門書を中心に進んでいくだろう。仮に十分な時間があれば、システム科学に関する専門書にも目を通したい。二つの科学領域の知識は、焦ることなく徐々に獲得していき、構築された知識体系を元に実際の研究や企業との協働プロジェクトにそれを活用していきたいと思う。

作曲については、毎日行っているように、今日も曲を少なくとも一つ作る。とにかく、ここから三、四年程度は、過去の作曲家に範を求める形で修練が進んでいくだろう。おそらく、最低でも1000曲の模倣が必要だと思う。過去の作曲家の曲を参照しながら1000曲を作った時、そこで何かしらのことが見え始めるだろう。そこからようやく自分の曲というものの姿が浮かび上がってくるような気がしている。とにかく今日も、過去の作曲家の曲を参照しながら、一つか二つの曲を作っていく。

ふと気づいたが、ここ最近は作曲実践で得られた発見を日記に書き留めておくことがあまりなかったように思う。これは、実践の中で得られるものがなかったことを示しているのではなく、毎回の実践で得られることは豊富にあり、それらがいかんせん感覚的なものであるがゆえに、自分の言語化が追いついていなかったのだと思う。

このところは作曲理論に関する専門書を紐解くことはほとんどなく、その代わりに毎日誰かしらの楽譜を開いている。生の楽譜を参照し、そこから作曲に関する技術と感性を学んでいるような段階に今の自分はいるようだ。

毎日作曲実践をすることによって、「こうなったらこうする」「ああなったらこうする」というパターンが徐々に自分の内側に構築されているのを見て取ることができる。しかしながら、その数はまだ圧倒的に不足している。

一つ一つの楽譜は本当に最良の教材であり、作曲家は自らが獲得した技術と感性が詰まったパターンをそこに開示している。それらの量は無限大であるが、棋士が膨大な打ち手のパターンを獲得し、それを対局の場で具現化させるように、膨大な作曲パターンの構築物を自分の内側に築き上げていこうと思う。

ダークブルーの空はほぼ完全に明け、薄明るい空が広がり始めた。これが夜明けである。フローニンゲン:2018/2/25(日)07:15

No.806: Royal Minuet

Are we dancing intentionally or are we manipulated to dance? Time is passing by as if I were dancing in a royal court. Groningen, 08:35, Monday, 2/26/2018

2178. 秩序からの学び・混沌からの学び

気温は相変わらず低いのだが、今日も天気に恵まれている。たった今昼食を摂り終え、少しばかり日記を書き留めることにした。

早朝、薄桃色の空を眺めていた時、その美しさに息を飲んだ。振り返れば、昨日の夕方には、夕暮れ時の空の色に思わず息を飲んでいた。

フローニンゲンの早朝と夕暮れ時の空は本当に美しい。昼を迎えた今のフローニンゲンの空は、ライトブルー一色に染め上げられている。

私の視界の前には、遮るものが一切ない広大な空が広がっている。毎日こうして表情豊かな景色を眺めながら自分のライフワークに打ち込むことができている自分は、本当に恵まれているのだろうし、本当に幸福なのだろう。その恩恵に応える形で自分のライフワークを前に進めていこうと思う。

自分の期待や他者の期待、そして社会からの期待に迎合しない。自らが幸福であるという事実が生み出す期待と要求事項にのみ応えるようにする。日々積み重ねていくライフワークは、小さな自己や自分の外にいる他者に促される形で従事してはならない。それらを超越したものからの呼びかけと促しにだけ応じる形で日々のライフワークに打ち込んでいく。そのようなことを思う。

昼食を摂りながら、私は美意識の存在そのものと、その発達過程に関心を強く持っていることに改めて気づいた。この秋から仮に米国の大学院に客員研究員として受け入れられれば、そこでは表向きはオンライン学習についての研究をしながらも、独自に美意識について探究を進めていこうと思う。哲学の美学の観点と成人発達理論の観点を中心に据えて、私たち誰しもが持つ美意識の特質と発達過程を探究していく。これは密かに考えていた探究項目であり、その探究に本格的に乗り出す日も近い。美学を起点にし、芸術と人間発達の探究を進めていく。

今後も私は、学術機関の中で研究や学習を続けていくことになるだろうが、独学することも決して忘れてはならない。上記の探究項目に関しては、体系立ったカリキュラムを既存の学術機関に期待することはあまりできない。当然ながら、美学についてのコースを哲学科で履修することは可能であるが、自分が真に探究したいことを深めていくためには、自ら学んでいくことが大切になる。

体系立てられたカリキュラムの中で学ぶことの意義と、それらを逸脱して独自な方法で探索的に学んでいくことの意義。それら双方を忘れてはならない。

私たちは秩序から多くのことを学び、同時に混沌からも多くのことを学ぶ。秩序からの学びと混沌からの学びをこれからも絶えず継続させていく。それは人生の最後の日まで続くだろう。フローニンゲン:2018/2/25(日)12:38

No.807:Detection of fractal dimensions

Once I arrived at the internship office, I started data analysis. Today's focus was to detect fractal dimensions in the time-series data that I collected last week. I wrote R programming codes to conduct detrended fluctuation analysis (DFA).

As I hypothesized, the results showed that each time-series in every week lecture had a different fractal dimension. Then, I collected the scores of quizzes and weekly tests. After lunch, I'll conduct correlation and regression analysis between the scores and fractal dimensions.
Groningen, 11:57, Monday, 2/26/2018

2179. 二羽のカラスの争いより

普段人と話すことがほとんどないためか、文章を書くことを通じて自分という人間と対話をしている。日々綴っている日記というのは、まさに自分との対話に他ならない。言い換えると、自分という自己と自分という他者との対話を記録しているのが、この日記だと言えるかもしれない。

昨日の自己と今日の自己は異なり、その日の自己は時間の経過と共に絶えず異なる側面を開示する。そうした変化に富む自己と対話をすることは飽きることがない、と言えるだろう。先ほども自己との対話を行っていると、換気のために開けている窓から、小鳥の鳴き声が書斎に入ってきた。

自己と対話をしている私に対し、その鳴き声は小鳥と対話をすることを私に促しているようだった。しばらく小鳥の鳴き声に耳を傾けていると、早朝に見た微笑ましい光景を思い出した。

早朝、コーヒーを入れ、窓越しから外を眺めていると、一羽のカラスが口に何かを加えながら電灯のてっぺんに止まっていた。よくよくカラスの口元を見ると、それはタバコの箱か何かの紙切れだった。特に食べる場所などないと思うのだが、カラスはその紙切れを大事そうに口に加えていた。しばらく観察を続けていると、そのカラスは電灯の上で、その紙切れを下に置き、それをくちばしでつつき始めた。

すると、遠方から他のカラスが一羽やってきて、電灯にほど近い木に止まった。すると、そのカラスは電灯のカラスめがけて羽ばたいた。二羽のカラスは、よく分からない紙切れを奪い合うようにして小競り合いを始めた。その小競り合いが始まった時、とても面白いことが始まったと私は随分と興奮していた。

羽をばたつかせ、その紙切れを守ろうとするカラスと、それを奪おうとするカラス。二羽のカラスが小競り合いをしていると、その紙切れがカラスの口からこぼれ、ヒラヒラと電灯から地面に向かって落ちていった。すると、後からやってきたカラスがサッとそれを口でくわえて飛び去っていった。

もともとその紙切れをくわえていたカラスは、少し寂しそうな表情を浮かべ、「カァーカァー」と鳴き始めた。動物の世界を眺めていると、実に微笑ましい光景に出くわすことがある。

そもそも、なぜあのカラスはゴミのような紙切れを口にくわえていたのかは謎であり、それを奪おうとしたカラスの意図も謎である。二羽のカラスが始めた小競り合いは、結局はお互いのエゴから生まれたものなのかもしれない。あんな紙切れのために、なぜ二羽のカラスは争いを始めたのか。それについては少しばかり神妙な気持ちで考えを巡らせていた。

私は二羽のカラスが生きる世界を俯瞰的に眺めていたが、よくよく考えてみると、人間社会を俯瞰すれば、このような小競り合いはこの世界の至るところで常に起こっている。しかもその構図は、あの二羽のカラスがガラクタのような紙切れを奪い合うために争っていたことと非常に似ており、人間は別種のガラクタのために自らのエゴを剥き出しにし、争いを絶えず行っているように思えて仕方ない。フローニンゲン：2018/2/25（日）12:58

No.808: Investigation on synchronization by CRQA

While calculating fractal dimensions, I came up with a future research idea. The present data analysis just compares the fractal dimensions of time-series data generated from lectures and online learners' comments. Yet, in my future research, I want to investigate the synchronization between the two distinct time-series data. One of the best methods to conduct such an analysis would be cross-recurrence quantification analysis (CRQA). Groningen, 12:01, Monday, 2/26/2018

2180. 構築・創造の喜び

ふと顔を見上げると、雪が突然降ってきた。先ほどまではあれだけ晴天だったのに、今は視界が真っ白になっている。瞬く間に雪が地面に積もり、外は白銀世界と化した。天から舞う雪を眺めながら、「デジタルラーニングと学習環境」のグループ課題をこの辺りで一旦やめにすることにした。

午後からこの課題に取り組み続け、全体の三分の一ほど終わったのではないかと思う。この課題は、同じ研究グループに属している友人のハーメンと二人で取り組んでいる。先週の水曜日に学内のカフェテリアで一度ミーティングを行い、この課題のスケジュールと進め方を話し合った。Google Document上で作業を行うことにしており、午後に確認すると、ハーメンがすでにいくつかの文章を執筆していた。

今回の課題は、デジタルラーニングを提供している一つのウェブサイトを対象にし、そのコンテンツを分析するというものだ。分析の観点は多岐にわたり、デザインの観点、実証研究の観点、理論的な観点などである。理論的な観点に該当する教授法の欄を眺めてみると、ハーメンがすでに文章を執筆していた。どうやらハーメンは、教育哲学者のジョン・デューイが提唱した「実践学習」の観点から分析を試みようとしているようだ。

一旦ハーメンが書いた全ての文章に目を通した後、それと重ならないように、私の分析の観点を加えた。理論的な分析に関しては、私は「構成主義的教授法（constructivist pedagogy）」を採用することにした。これまで発達心理学を探究し続けていたこともあり、この教授法については事前知識もあるため、比較的文章が書きやすかったように思う。その他、認知的積載理論を用いた説明を加えていこうと思う。

今日はこの課題に取り組む初日だったのだが、随分と速やかに筆が進んだように思う。日本語にせよ、英語にせよ、私は話し言葉を用いることはあまり得意ではないが、どちらの言語にせよ、書き言葉であれば一切の苦なくしてその行為に没入することができる。やはり私は話す人間ではなく、書く人間なのだと思う。また、この課題に取り組んでいる最中、学術的な文章を構築していくことは、プログラミングコードを書く際の喜びと瓜二つであり、作曲をする際の喜びと等しいものであることに気づく。

創造する喜び、そして構築する喜び。学術論文を執筆することは、やはり創造的かつ構築的な特徴を持っており、この二つの側面が私に充実感をもたらすのだと改めて知る。

雪が降り始めたにもかかわず、すぐに気づかないほどに、文章の執筆にのめり込んでいたことが、学術的な文章を執筆することに対する自らの適性を語っているように思えた。

ここでまた文章の手を止め、顔を上げて書斎の窓の外を眺めると、雪が止んでいるではないか。文章を執筆することにのめり込む自分がここにもいる。

遠くの空が夕日に照らされて赤く輝き、一日の終わりを静かに告げている。フローニンゲン：2018/2/25（日）17:55

No.809: The Gentle Sunshine

The cold in Groningen has become severe again since yesterday. Yet, the gentle sunshine is falling down from the sky, which makes my being vigorous. Groningen, 08:22, Tuesday, 2/27/2018

© YOHEI KATO 2019